

天文学とプラネタリウム

第42回

今月のお題

火の競演、火星キャンドル完成！



紅い炎が彩る赤い星。12月の火星接近に先駆けて、リアルな火星キャンドルを作成しました。



www.tenpla.net

高梨直紘（東大D3／天文学教育研究センター所属）

平松正顕（東大D3／国立天文台ALMA推進室所属）

「6万年ぶりの大接近」と世間を騒がせた2003年夏の火星、皆さんは覚えていらっしゃるでしょうか？各地の科学館・天文台で開催された火星観望会はどこも盛況、多くの方が赤い隣星に思いを馳せました。あれから4年4ヶ月、2007年12月にまた火星と地球が近づきます。火星の見かけの大きさは2003年のときの6割ほどと、「大接近」というほどの現象ではないですが、前回見た方も見逃した方も要注目のイベントになることでしょう。

火星をあなたの手の中に

あの赤い火星を手のひらの上でグルグル回してみたい。日常的に火星を近くに感じたい。厚い地球大気の向こうに揺らめく赤い点に魅せられた誰もが抱く欲求を満たすため、天プラでは火星を忠実に再現したキャンドルを作成しました。直径6センチ、縮尺およそ1億分の1の火星表面で目につくのは、太陽系最大の火山オリンポス、なかよく並ぶタルシスの3峰、グランドキャニオンも真っ青な大スケールで迫るマリネリス渓谷、そして白い氷を頂く南北の極冠。そ

れだけではありません。薄い地殻、その下のマントル、さらに内部には中心核が隠れています。表面だけでなく内部にまでこだわったこの火星キャンドル、巷に溢れる「癒しグッズ」としてのキャンドルとは一線を画した、ワクワクする一品に仕上がりました。

4年前の大接近以降、スピリット・オポチュニティーの2台のローバーを初めとする探査機が火星の新しい姿を次々に明らかにしてきました。そして2008年には、先日打ち上げられた新たな探査機「フェニックス」が極地方の氷を求めて降り立ちます。フェニックスの無事の着陸を祈りながら、更なる新しい発見の報を心待ちにしながら、あるいは望遠鏡で揺らめく火星を見ながら。溶かすも眺めるも、火星の運命は貴方次第です。

実はこの火星キャンドル、型はあるもののロウを流し込んで整形をして、という一連の行程は完全手作業なのです。というわけで、残念ながら今すぐに皆さんのお手元にお届けすることができません。これを読んでいるロウソク職人なアナタ！ 太陽系キャンドルシリーズ、一緒に製作しませんか？



火星キャンドルの試作品。オリンポス山とタルシス3山、マリネリス峡谷まで忠実に再現。カラーでお見せできないのが残念です。



電車好きだったはずなのに最近めっきり車移動の高梨。平松は野辺山出張中につきおやすみです。